

二〇二五年度・学力考查問題【国語】

(高校第二回)

注意

- 一、試験時間は50分です。
- 二、答えはすべて解答用紙にはつきりと記入しなさい。
- 三、解答用紙のみ試験終了後集めます。
- 四、問題は15ページで□・□・□・□の四題あります。開始の合図で必ず確認し、そろっていない場合にはすぐに手をあげなさい。
- 五、本文の表現については、作品を尊重し、そのままにしてありますが、設問の都合上、省略した部分、表記を改めた部分があります。また、特に指示のないかぎり、句読点も一字に数えます。

線④⑤のひらがなを漢字に直しなさい。

- 1 計画のいっかん。
- 2 えものを取り逃がす。
- 3 かん性があるかを確かめる。
- 4 立つ鳥跡をにごさず。
- 5 大災害にみまわれる。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

【文章I】

筆者は、^{※1}チャウシエスク政権による社会主義国時代のルーマニアに生まれ、高校生のころに読んだ川端康成『^{※2}雪國』に影響を受けて日本に留学し、現在は青森県に住む。

本文は、筆者が八歳の頃の実体験に基づく記述である。

八歳の時、団地の長い暗い回廊かいろうが私の舞台になっていた。雨が降るたびに屋根から壁に流れる黒い液体やカビの匂いは、引越したばかりの時から気持ち悪かった。それは草のようなものが生える感触だった。あの団地では生きているものはカビしかなかった。暗かったからあの回廊を通ると目が刺される気がした。そこで私は、ある日突然バレエの練習をはじめた。バレエといっても、裸電球の下もとの無茶な踊りに過ぎないが、私にとってそれは団地で暮らした日々の中で一番気が晴れる時間だった。

社会主義が解体して、テレビが自由（本当の意味での自由かどうかはまだわからないが）になった。海外の番組もはじめて見た。しかし、テレビと言えば、私の覚えている最初のイメージは、やはりチャウシエスクが殺された映像だった。あのシーンは全国民がテレビで見ただけだ。世界もそれを見ただろうが、私たちはまだ外の世界からとても遠いところにいた。

毎年クリスマスごろになると、いまだにチャウシエスク夫婦の裁判

と射殺シーンが流される。そのたびに、一連の動きが映画のように細かくカットされる感覚に変わる。何回も見ているうちに、次第に映画のように見えるようになるのだ。チャウシエスクの声とエレナ夫人の言葉は全部覚えてしまうし、仕草やまなざし、拳銃の音やリズムなどが、すべて自分の身体に染み付いていく。彼らは最後の最後まで、何十年にもわたるパフォーマンスを止めなかったのだ。

日本²で出遭³った人と世間話をした時、私がルーマニア出身と知ったから「貴方²の国も最高のパフォーマンスを世界に見せたね」と言われた。そのシーンのことだとすぐわかった。世界は見たかっただろう、こういうものを。遠い昔、ここはディオニソスの地だった。世界にパフォーマンスを見せないわけにはいかない。でも、その後すぐに観客は立ち去り、ステージは空っぽになった。流された血がリアル過ぎだった、と出遭った人は感想を漏らした。チャウシエスクを打倒したあの革命の時、若者らは自分の命が奪⁴われても、ステージに立って、己の役を演じ切った。

社会学者のゴッフマン⁴が言ったとおり、日常はパフォーマンスであり、世界は大きな結婚式⁴だ——この場合は葬式⁴か。私は、たまたまそのような場所に生まれた子供だった。

はじめて、テレビでバレエを観た時のことを覚えている。こういう類のパフォーマンスの日常を生きていた時、フランスのアルテというチャンネルがケーブルでつながった。白い、軽いバレリーナの身体は、私に特別な印象を与えた。こんな軽い身体をもっている人がいるなんて。踊りの演目はぜんぜんわからなかったが、バレリーナの身体は興味深かった。それはとびぬけて白く、自由な人たちはこんなに軽い身

体をもつのかと思い始めた。

バレエをテレビで見たあと、団地の回廊で真似し始めた。父の母は昔、布を作る工場ですつと働いていたから、家にはきれいな白い布の切れ端がいっぱいあった。誰も使わないキラキラした布。私は自分の身体に巻いて衣装を作る。バレリーナというより古代ローマの貴族の奴隷⁵みたいになったけど、その衣装ですつと何時間も暗い回廊で踊っていた。暗がりのなか、私の巻いた白い布が光っていたと勝手に思った。そして、新しい夢が見えた。そうだ、私はバレリーナになるのだ。だが、現実はいくら白い布を巻いても、私の身体が暗みの中に浮かぶだけだった。

その年のうちにその夢は完全に潰⁶された。いま考えてみれば、環境が違いすぎたのだ。社会的な格差もあったが、私の身体はもつと深いところで何か非常に重い物に引⁷つ張られたようだった。街中の団地に引⁷つ越しても、家族そろって他所⁸から引⁷つ越してきた、ただの田舎者だった。悪い意味ではなく、ただ、町の暮らしに身体が慣れるまで何年もかかるのだから仕方ないのだ。団地特有の狭くて薄暗い空間に自分の身体が絞⁹られるような感覚、息ができない感覚が毎日のように感じられた。

*

団地があつたのは社会主義の名残を残した小さな工場だらけの町なので、大学に上がるまでオペラやバレエの上演がある劇場や映画館に出かけたことが全然なかった。今にしてみれば、あれは人間から宗教とアート、尊敬を奪¹⁰つたら、その社会に何が残るのかという、一種の社会実験だったのかとさえ思う。

母と父は経済的な余裕がなかった。二人とも生きるのに必死だった。母は朝から肉と牛乳の行列に並び、父は工場の仕事にすべてのエネルギーを使い果たすような毎日だった。ある意味、私たちは日常生活そのものを「X」として生きていた。父は毎晩遅く工場から帰ってきて、顔は真っ赤でアルコールの匂いがした。そしていつも何か叫んでいた。私と同じく彼にも潰された夢がたくさんあったのだ。

家族では毎晩、壮大な劇が演じられた。物が割られ、服が破られ、壁に酒瓶が投げ付けられる。それが朝まで続く。

父が働いていた工場は、街で最大のものの一つだった。一回その仕事場を見に行った時、チャップリンの『モダン・タイムス』を想起させる不気味な雰囲気があつて、正直とても怖かった。人間が機械を支配しているのか、それとも機械が人間を支配しているのかわからない。それはとても微妙な関係が生まれているような空間で、身体に染み込んでくる。オーウエルの『1984』の雰囲気がよく当てはまる。

私が言いたいのは、そのような工場が本場に存在していたということだ。そして、そこで働かされていたのは、私の父みたいな肉体を持っている生の人間だったのだ。工場は子供の目線から見ると、人間と機械が混ざった、豚の内臓のような無茶苦茶な空間に映った。解体した豚を一度見るといい。内臓と血の塊の中からまだ温かい、死んだばかりの生き物の気が立ち上る。

私にとって、工場の機械も生物の器官として理解できたが、やはり豚が生き物なのに対して、あの中の内臓が恐ろしいものの内臓としか見えなかった。父は仕事服を着て、自慢げな顔でその化け物のような機械を紹介する。父はプロバガンダ映画に出ている若手エンジニアの

像そのものだ。工員の顔を見るのはとても好きだった。そこで働いていた人たちは父と同じ、田舎出身だった。つらかっただろう。川と森の代わりに機械を見守る毎日。社会主義国家に生まれ、完全に計画経済の子だったため、工場は彼らの身体を支配し続けた。父はよく頑張ったと思う。私はそのようにはなりたくなかったから、私の身体があらゆるものにたいして抵抗しつづけた。言葉を完全に失うまで。

毎晩、父が暴れるたびに、私の身体は動かなくなった。ひとたび傷つけられると、身体がまったく反応しなくなる。金縛りのような状態が何時間も続いた。ルネ・マグリットの絵に出てくる空に浮かぶ大きな石のように。意識があるけれど不思議に身体が動かさない。つらかつたというより、今にしてみればある種の踊りにしかすぎなかった。傷つけられた身体で懸命に自然を探そうとしていた。

(イリナ・グリゴレ『優しい地獄』亜紀書房より)

- ※1 チャウシエスク：一九一八―一九八九。一九六五年からルーマニアを指揮した政治家。経済の中央集権化や人権の抑圧を推進し、個人の自由や表現の自由を制限した。一九八九年に大規模なデモが発生し、軍に拘束され、妻と共に処刑された。
- ※2 川端康成：一八九九―一九七二。日本の小説家。一九六八年に日本人初となるノーベル文学賞を受賞した。
- ※3 デイオニユソス：激情的な芸術を象徴する祭神。紀元前にはデイオニユソスの名を冠した劇場が作られた。
- ※4 ゴッフマン：社会学者のアーヴィング・ゴッフマン(一九二二―一九八二)は、主著『行為と演技』のなかで、行為者が自

己認識した役割を演じるなかで社会性が獲得され、それによってコミュニケーションと社会が成立していると説いた。

※5 『モダン・タイムス』：一九三六年公開のアメリカ映画。チャールズ・チャップリンが監督・製作・脚本・作曲を担当した喜劇映画。

※6 『1984』：一九四九年に刊行されたジョージ・オーウェル作のSF小説。

※7 プロバガンダ：特定の主義や思想についての政治的宣伝。

※8 計画経済：市場の自然なメカニズムに任せるのではなく、国家が統御する経済体制。

※9 ルネ・マグリット：一八九八—一九六七。ベルギー出身の画家で、超現実的な作風で知られる。

問一——線1「そこで私はバレーの練習をはじめた」とあり

ますが、それはなぜですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ジメジメしたカビくさい団地の暗い回廊が嫌でたまらず、その辛気臭い雰囲気（しんきくさい）を少しでも軽いものにして家族を笑顔にしようと思ったから。

イ 黒カビにしか生を感じられないような団地の中では、生の象徴である白色の衣装を纏（まと）って踊るバレリーナになる必要があったから。

ウ 自由が許される社会となったため、テレビに映るような有名なバレリーナになれば、貧しい生活から抜け出せると考えたから。

エ 暗い団地生活に嫌気がさす中、白い衣装を着て自由に踊るバレリーナの姿をテレビで見て、その身体の軽やかさに憧れを抱いたから。

問二——線2「貴方の国も見せたね」とありますが、ここで

の「パフォーマンス」として適当でないものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 革命に命を懸けるルーマニアの若者たちの姿。

イ テレビに映し出されるチャウシエスク夫婦の言動。

ウ 社会主義国家崩壊の瞬間を興味本位でのぞき見て、すぐに

関心を失う世界の人々のふるまい。

エ 政治動向に巻き込まれながらも日々営まれていくルーマニ

ア国民たちの生活。

問三——線3「現実はい／＼浮かぶだけだった」とありますが、こ

の表現から筆者のどのような思いが読み取れますか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 手作りの真っ白な衣装を着て何時間も暗い回廊で踊りの練習に励んだが、酒に酔って暴れる父におびえる「私」の身体は、バレリーナよりも古代ローマの奴隷どれいに近いものになってしまった。

イ きれいな衣装で軽やかに踊るバレリーナのような自由な身体を夢見たものの、現実には、その夢を叶えるために必要なお金を準備できない「私」の貧困を思い知らされるばかりであった。

ウ 不自由な現状から脱却したいという無意識の願望から、「私」はバレリーナに憧れたが、田舎の町ではオペラやバレエの上演があるわけもなく、ただ夢と現実の生活との違いが強調されるだけだった。

エ 自由な身体に憧れて白い衣装を身にまとい踊ってみたものの、実際には貧しく苦しい生活から逃れられるわけでもなく、むしろ「私」の息がつまるほどの不自由さが際立つばかりであった。

問四——線4「あれ」の指す内容として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 社会主義の生活感覚が抜けなかった青年期。

イ 団地のあった町での娯楽のない生活。

ウ チャウシエスタ政権崩壊後の自由な都心部。

エ 革命後のルーミアアの田舎。

© 日本チャップリン協会



問五 に入る七字の単語を文中から探して抜き出しなさい。

問六——線5「チャップリンの『モダン・タイムス』とありますが、

次に示す【文章Ⅱ】は「モダン・タイムス」の批評文です。また、その次に示すのは【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】を読んだ生徒たちの会話です。それぞれの文章の内容をふまえて、い／＼意見はどれでしょうか。選択肢の中から二つ選び、記号で答えなさい。

【文章Ⅰ】

モダン・タイムスのチャップリンは真面目な労働者である。ベルトコンベアーにのって流れてくる部品のネジを、流れに遅れないように必死になって猛スピードで締める。これがチャップリンの仕事である。まったく単調な同じ作業の繰り返し。これが分業化された近代的な機械作業の本質である。そこに生産性

というスピードが加わる。機械による資本主義的生産は、自らがもの全体を作るという自律した労働形態を人間から奪ってしまった。機械は人間がものを作るための道具というより、人間をその一部として働かせるものとなる。機械の人間支配であり、人間の機械化である。生産性をさらに上げるには、ベルトコンベアーのスピードをアップするだけでよい。スピード＝生産性についていけない人間は、チャップリンのようにまさに機械に飲み

込まれてしまうのである。

〔東海学園大学研究紀要…人文学・健康科学研究編〕所収

大場厚志「チャップリン『モダン・タイムス』の

冒頭18分を「読む」より

ア 生徒A——【文章Ⅰ】で筆者は、父が働いていた工場は、

機械が人間の身体を支配しているかのように感じられる不気味な空間だったと書いていたね。

イ 生徒B——【文章Ⅰ】の「人間が機械を支配しているのか、

それとも機械が人間を支配しているのかわからない」というところだね。【文章Ⅱ】でも似たような内容の表現が確認できるのが興味深いな。

ウ 生徒A——【文章Ⅱ】では、それを「自らがもの全体を作るといふ自律した労働形態」と表しているね。

でも、おかしいな。【文章Ⅰ】で論じられているのは社会主義国家時代のルーマニアなのに、

【文章Ⅱ】で論じられているのは資本主義社会だ。

エ 生徒B——つまりは、社会主義社会でも資本主義社会でも、労働者の置かれた立場には共通する辛さがあるということかな。働くのつて大変なんだな。

【文章Ⅰ】で筆者は、「工場は彼らの身体を支配し続けた」と書いているから、普遍的な問題なのかもしれない。

オ 生徒A——もう一つの共通点は、どちらの文章も工場の

内部を生き物のように表現している部分と言え

問七

線6「つらかったというより」すぎなかった」7「傷

つけられた身体で」探そうとしていた」とありますが、本文全体をふまえたうえで、それらの説明として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 仕事から帰って酒を飲み暴れる父の前で、言葉を失い、身体を硬直させることが、私にとつてのパフォーマンスだったと気づいた、ということ。

イ 荒んだ家庭と新しい地域にうまく溶け込めない状況で、私の身体はルネ・マグリットの浮かぶ岩石の絵のように硬直と浮遊とを交互に繰り返していた、ということ。

ウ 父が暴れはじめると身体が動かなくなる私は、苦しい夜を乗り越えるために、パフォーマンスとしてバレエを踊る自分の姿を想像して堪えていた、ということ。

エ 夢を諦めざるをえないような辛い現実には日々打ちのめされながらも、パフォーマンスではない、自分にとつての自由を必死に模索していた、ということ。

オ 夢を諦めながらも工場で働く父が夜中に荒れる姿を見て、引越す前の自然豊かな田舎で、家族で仲良く生活していたころを思い出していた、ということ。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

夫が少し目を離している間に生春巻きを食べたことで胃腸炎になってしまった娘（「みーちゃん」）の世話を夫に頼んで、「私」は父親の還暦祝いの品を渡すために実家に帰ろうと電車に乗っている。

物心ついたときから父は無口な人だった。自分から家族に話しかけることは滅多めったになく、いつも本を読んでいた。大学で英文学を教えた父が読む本は、子供の私には読めない英字でびっしりと埋めつくされていた。姉は無邪気に興味を示し、問われれば父は答えた。けれど、私になにか尋ねても父は私の顔を見ずにぼそぼそと早口で喋しゃべった。姉が小学校に入学すると、父は私たちにイギリスの童話を朗読させるようになった。パジャマに着替え、歯を磨いたら父の書齋へ本を持つていくのが習慣になったが、私は眠くて姉が朗読をしていると首がかくかくと揺れた。すると、父は「お前は寝なさい」と冷たい声で言った。姉には間違えたところを何度もくり返させるのに、私が一回でも間違えると「もういい」と終わらせてしまう。父はいつもそうだった。姉と私で対応が違った。習い事も進路も、私には「好きにしなさい」としか言わないのに、姉の選択には口をだした。姉は「あんたには甘いのに、私には厳しい」と文句を言っていたが、私からすれば父は私になんの期待もしていないように見えた。はきはきと物を言う姉が面白いのか、父は姉の前ではときおり笑顔を見せた。けれど、私の前では

むつつりと口を結び、目を合わせることもすらしなない。私は萎縮いしよくし、ますます父と話せなくなった。反抗期の姉が、父と口論したり、無視したりするのを、驚きと微かな嫉妬をもつて眺めた。姉はそんな私のことを「あんたはいつつもいい子でムカツク」と断じた。私は父の前では「いい子」でいるしかなかった。

子供がふざけ合う高い声で我に返る。合羽※1を着た小さな姉妹はお互いをくすぐり合って笑っていた。

血Xがながった親子とはいえ相性がある。結婚し、娘を産んで、そう思えるようになった。けれど、ふとしたことで幼い頃の寂しさはよみがえる。特にこんな雨の日は。

アナウンスが実家のある駅名を告げ、私は長すぎる紙袋を脇に抱えて電車を降りた。

「それ、薔薇ばらか銃？」と出迎えてくれた母が笑った。相変わらず、父は居るのに出てこない。

濡ぬれてしまった紙袋から、リボンのかかった細い包みを取り出す。

「どっちも外れ。ていうか、銃はないでしょう」

「お父さん、運動不足だからモデルガンかなって」

「なんで急にサバイバルゲームさせるの」と笑ってしまう。本気か冗談かわからない、とほけたことを言う母からはほんのりと酢飯の匂いがした。父の好物のちらし寿司を作っているのだろう。

父は、私が高校生でふしよくのときに大学を辞めて、翻訳の仕事をはじめた。ますます不精でふしよくになり、日がな一日書齋ひにこもっているようになった。少しは日に当たったらと母と姉が口やかましく言うと、午前中はサン

ルームで本を読むようになったが、運動はおろか外出もほとんどしない。

「みーちゃんの具合が悪いからプレゼント渡してすぐ帰るね」

「あら、そうなの。後からくるのかと思つたわ」

「胃腸炎だから食べられないし、症状は落ち着いたけどまだぐったりしてるから」

「あ、じゃあ」と母が階段下の物置を開ける。「こんなのがでてきたけど持っていけない？」

母が引きずりだした段ボール箱の中には子供用の絵本や玩具がごちやごちやと入っていた。どれも黄ばんだり、塗料が剥げたりしている。

「もーお母さん、これ、みーちゃんが生まれたときも見せてきたよ」

「そうだったけ」

「そうだよ。おもちゃが増えても仕方ないからレンタルにするつて言つたじゃない。それに、古いおもちゃを幼児に与えるのは衛生的に良くないし」

でも、捨てたらとは言にくい。まだ使えるものはないかと思まわすと、パサついた栗色の髪の毛の人形に目がいった。まぶたが丸く盛りあがつていて、頭を動かすと目をあげたりとじたりする、ミルク飲み人形だった。長い睫毛はばらばらの向きに散らばり、レースのついたピントクのワンピースは色褪せていた。

けれど、私の目をひいたのは、額にマジックペンで描かれた線だった。ぎゅつぎゅつと不器用にひかれてある。なんのしるしだろう。

「なにこれ」と線を指でなぞる。

「その子、お気に入りだったのよ」

「そうじゃなくて、この落書き」

「ああ」と、めずらしく母が言いよどんだ。「あんたが描いたの。お揃いだった」

「お揃い？」

「そう、自分とお揃いにしたのつて」

「私と……」

自分の額に触れて、傷があつたことを思いだす。とはいえ、ほとんどわからない。酔つたときに赤く浮きあがるくらいだ。思春期は前髪を厚くして隠していたが、小学生の頃はクラスの男子に見せつけて「頭割れて縫つたんだよ」と自慢をしたこともある。けれど、もうすっかり忘れていた。むしろ、最近でてきた額の横皺のほうに気がなる。「これを見たあの人がショックを受けてね」と母が呟く。

「なんで、お父さんが」

え、という顔。ややあつて「まだ話してなかったのねえ」と呆れたように笑つた。「昔、庭にさくらんぼの木があつてね、実が生るとお父さんが採つてくれたの覚えてない？」

首を横にふる。まったく記憶になかつた。

「けっこう酸っぱかつたんだけど、あんた好きでね。あたしがお姉ちゃんを歯医者に連れていつているときに、自分で木に登つて採ろうとしたの。お父さんにあんたの面倒を頼んでいただけ、目を離しちゃつたみたいで。また運悪く、脚立が木のそばに置いたままだったのよ。泣き声でお父さんが庭に飛びだしたら、倒れた脚立の横にあんたが血まみれの顔で転がっていたんだつて」

木から落ちて怪我をした痕だとはうつつすら覚えていた。病院で縫わ

れた記憶もある。でも、そのときの状況は知らなかった。

「よっぽど気が動転していたのか、救急車も呼ばず、あんたを抱いて走って近所の大島内科さんに駆け込んだらしいわよ。ぱっくりひらいた額の傷をずっと指で押さえていたって、後で看護師さんたちが言っていたねえ」

「さくらんぼの木は？」

「あなたの抜糸が終わる前に、あの人が植木屋を呼んで伐らせちゃった。庭もサンルームに変えて。悔やんだんでしようね。嫁入り前の娘の顔に傷を残してしまった、と何回も言ってたわね」

古い、と思わず顔をしかめる。母は「古い人間だもの」と眉毛を下げて微笑んだ。

「お母さんもそう思ったの？」

「可哀相だとは思ったけど、あの人があんまり何度も言うから、なんか苛々しちゃって、できたものは仕方ないでしょって言っちゃったの。額に傷ひとつあるくらいで女の価値が損なわれると思うような相手なんて願い下げだし、結婚のときのいい判断基準になるじゃないって」

声をだして笑ってしまった。母も一緒に笑い、ちよつと息を吐くと言った。

「でも、自分が原因だったらそうは言えなかったでしょうね。あの人がそれからなんにも言わなくなっちゃった。でも、忘れていないのよ、絶対に」

母は私の手からミルク飲み人形を取ると、段ボール箱に戻した。肩をまわし、「ちらし寿司とかおかず持っていきなさい。すぐ詰めるから」と慌ただしく台所へ向かう。

「大丈夫」と言ったが、もう聞こえていなかった。

台所から響く揚げ物の音を背後に聞きながら居間を横切り、サンルームに向かう。ガラス張りの小さな部屋は観葉植物と母が育てているハーブ類のプランターでごちゃごちゃしているが、雨の日でもぼんやりと明るい。

その灰色がかった淡い光の中に父がいた。籐の椅子に腰かけ、ペーパーバックの洋書をめくっている。見慣れた姿だったが、背は前より丸くなった気がした。眼鏡の中の目は、私が近づいても英字にそそがれたままだ。

「来ました」と言っても、「ああ」としか返ってこない。やっぱり私の顔を見られないんだなと思う。自分が原因だと思っている傷があるからだろうか。一人では生きていけなかった小さな娘はもういない。結婚し、子を産み、さくらんぼだつて自分の働いたお金で買える私は、古い傷などすっかり忘れていたのに。

「お父さん、誕生日おめでとう」

細長い包みを差しだす。父は傍らの台に本を置くと、黙って受け取った。「なんだ」と言いながらリボンを解く。

「傘です。雨男のお父さんにはぴつたりかなって」

「赤いんだが」

「還暦ですから」

「そうか」と父は納得していないような顔で言った。いや、いつもこんな顔をしている。

「すまないな」

必ずそう言う。「ありがとう」ではなく「すまない」と、まったく嬉しくなさそうにはそりと眩く。ひねくれている、とずっと思っていた。けれど、この人の私への気持ちにはいつも「すまない」があったのだと、いまはわかる。

父は赤い傘を持ったまま黙っていた。サンルームの天井に雨粒がどろどろ落ちてくる。雨音に包まれていると、小さい頃のことを思い出した。

雷が苦手だった私は雨の夜が怖かった。家族が寝静まった深夜に目を覚ましてしまうと、雨の音が聞こえないように耳を両手でふさいでベッドで身をこわばらせていた。

そんなとき、誰かがやってくることがあった。ドアがひらいた気配がして、腰かけた重みでベッドがたわむ。温かい手が頭に置かれ、ゆつくりと撫でる。親指の腹でそつと額をなぞられると安心して、深い眠りに落ちた。あれは、ずっと、母だと思っていた。雨音が響く。父と私だけで雨の中に浮かんでいるようだった。

「雨の晩に頭を撫でてくれたの、お父さんだったんだね」

父の肩が小さく動いた。

傷痕が消えますように。もう傷を負いませんように。雨音の中、そう祈っていたのだろうか。

傷なくして生きていくことが不可能だとわかっている、祈ってしまいう気持ちを私は知っている。

父が「すまない」と言ってしまう前に「ありがとう」と眩く。きつと私は父とそっくりの困ったような顔で笑っている。

(千早茜『グリフィスの傷』集英社所収「慈雨」より)

※1 合羽を着た小さな姉妹：「私」が乗っている電車の乗客

問一 —— 線 a 「目をひいた」・ b 「顔をしかめる」とありますが、

本文における意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選

び、記号で答えなさい。

a 目をひいた

ア 視線をそむけさせた

イ 不審に思わせた

ウ あつと驚かせた

エ 注意を向けさせた

b 顔をしかめる

ア 混乱する

イ 受け入れがたく思う

ウ 深く考え込む

エ 懐かしく感じる

問二 —— 線1「驚きと微かな嫉妬」とありますが、この時の「私」

の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「私」とは違い、朗読の練習を繰り返すほど仲の良い父と姉が口論している姿を見て驚いている一方で、反抗的な態度を取る形で甘えることができる姉をうらやましく思っている。

イ 父の前では従順でいることしかできない「私」にとっては、意見を対立させたり、無視したりして反抗する姉の行動には驚きを隠せない一方で、父にそうすることができるとうらやましさを抱いている。

ウ 幼いころから父と良好な関係を築いてきた姉が、父と口論するようになった姿を見て驚いている一方で、「私」のことは気かけずに父が姉のことばかり心配していることにねたましさを抱いている。

エ 「私」の選択に口出しをしないような父が姉には意見をしている姿を見て驚きを隠せない一方で、「私」に恨み言を言いなながらも父と対等な立場で意見を交わすことができる姉をねたましく思っている。

問三 —— 線2「え、という顔」とありますが、この時の「母」の

説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分で描いた人形の額の傷を見て父の過失で額に傷を負ってしまったことを思い出した「私」の様子から、長い時間が経った今でも父が「私」に謝罪していないことを知り、驚いている。

イ 幼い頃にさくらんぼの木から落ちて傷を負ったときに父が必死に助けてくれたことを忘れて「私」の様子から、あれだけ大変な出来事だったのにどうして覚えていないのかと驚いている。

ウ 人形の傷の絵を見てもその絵と父を結びつけることができないう私の様子から、父が「私」のために何度もさくらんぼの木に登って実をとってくれたことを忘れていることに気づいて、驚いている。

エ 幼い頃に自分が負ったのと同じ箇所に傷の絵を自分で描いた人形を見ると父がなぜ嘆くのかを「私」がわかっていない様子から、父がまだ事の真相を「私」に打ち明けていないことを知り、驚いている。

問四 ——線3 「母も一緒に笑い、ちよつと息を吐くと言った」と

ありますが、この時の「母」の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 価値観の古さから出る父の言葉をからかっていたものの、自分の過失によって「私」に傷をつけてしまったことを長い間後悔し続けている父に対して同情している。

イ あまりにも価値観の古い発言をする父をおもしろく思ったものの、自分の中にも父と同じ価値観が根付いていることも自覚している。

ウ 父の発した、古い価値観による言葉があまりにもおかしく感じられたものの、その言葉に対して激しく反論したことを後悔している。

エ 父の価値観の古い言葉に対する自分の言葉が的外れだったことを「私」と一緒に笑ったものの、自分が父の立場だったら同じように後悔するだろうと推測している。

問五 ——線4 「眼鏡の中の」そそがれたままだ」とありますが、

この時の「父」の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「私」が近づいていることに気づかず集中して読書する振りをして、今まで「私」にしてきたことを謝罪する機会をうかがっている。

イ 子どものころと変わらず「私」のことを軽蔑しているので、「私」が近づいてきていることに気づいているものの、読書に集中する振りをして無視している。

ウ 「私」に対する負い目から直接顔を見ることができないので、あたかも「私」に気づいていないかのように振る舞っている。

エ 「私」が近づいているにも関わらず、お気に入りのサンルームでの読書に没頭しているがゆえにまったく気がつかないでいる。

問六 —— 線5「けれど、この（ ）いまはわかる」とありますが、

この時の「私」の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 父に萎縮して従順であり続けた「私」に対して父は何の期待も持っていないと思っていたが、「私」自身も親になったことで、実際は姉よりも「私」の方を大切に思っていたということを実感した。

イ 姉に対しては笑顔を見せてきた父が「私」に笑顔を見せなかったのは「私」に対する謝罪の気持ちがあったからだと思っていたが、その気持ちは思っていたよりもずっと大きいものだったと確信した。

ウ 父の冷たい態度の根底には「私」の顔に傷をつけたことへの罪悪感があることを母から聞いて知り、自分自身も親になったということもあり、「私」に対する父の思いに初めて共感できた。

エ 父の好きなものに興味を示すことができなかった「私」に対して、父はひねくれた態度をとってきたが、「私」自身も親になったことで実はそのことに罪悪感を抱いていたと初めて知った。

問七 —— 線6「父と私だけ」浮かんているようだった」とあり

ますが、その表現について述べたものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ベッドでおびえていた「私」を撫でてくれたのは母ではなく父であったと知ることができたのは、さくらんぼの木から落ちた「私」を助けたのが父だったと教えてくれた母のおかげである、という母への感謝が表現されている。

イ 雷が鳴る夜にベッドの中でおびえていた「私」の頭を撫でてくれたのは母ではなく父であったとわかったことで、今まで気づかなかった父の慈しみに包まれるような感覚の中にいる「私」の様子が表現されている。

ウ 父に対してどのように接してよいかわからなかったが、ベッドの中で雷におびえていた「私」を撫でていたのは自分であるということを、長い間明かさずにいた父に対する「私」の尊敬の念が深まっていく様子が表現されている。

エ 「私」を支えてくれていたのは母や姉だけではなく、父もベッドの中で雷におびえている「私」を祈るように撫でてくれていたことに気づき、改めて家族の大切さを実感している様子が表現されている。

問八 —— 線X「血がながった」相性がある」・Y「きつと私

は（ ）笑っている」とありますが、この間に父に対する「私」の心情はどのように変化しましたか。詳しく説明しなさい。

四

問題文を読んで、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合上、送り仮名や返り点を省略した部分があります。

地方官に任命されることを長年の願いとしていた藤原為時のもとに、越前の国（現在の福井県あたり）で地方官の一つである国司の座に空きが出たとの知らせが入った。

※1

一条院の御時、越前の国あきたりけるを、源国盛、藤原為時、ともに望み申しけるに、御堂殿、とり申されけるにや、国盛をなされにけり。為時、愁へに堪へず、申文を女房につきて奉りける。その詞にいはいはく、

苦学 X 紅涙盈巾 X 苦学の春朝 蒼天眼に在り

除目 春朝 蒼天 在眼 除目の春朝 蒼天眼に在り

帝、御覽じて、供御も参らず、夜の御殿に入らせ給ひて、御心勞ありけるを、 Y 聞きて、参らせ給ひて、国盛を改めて、為時をなされにけり。

〔『十訓抄』十ノ三十一より〕

※1 一条院：一条天皇のこと。後の「帝」も同じ。

※2 御堂殿：藤原道長のこと。

※3 申文：目上の人に向けた意見書。

※4 盈巾：手ぬぐいを濡らした。

※5 除目：任命儀式のこと。春には地方官の任命を行う。

※6 供御も参らず：お食事も召し上がらず。
※7 夜の御殿：帝の寝所のこと。

問一 線1「御堂殿、とり申されける」とありますが、その解

釈として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 御堂殿が国司の人選を行ったのだろうか。

イ 御堂殿に決めてほしいと願ひ出たのだろうか。

ウ 御堂殿に望みを叶えてもらえたのだろうか。

エ 御堂殿も国司の座をねらっていたのだろうか。

問二 線2「愁へに堪へず」とありますが、「為時」の心情の

説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 御堂殿よりも出世が遅れることを考えると、どうしても我慢ができない。

イ 念願だった国司に自分が選ばれなかったことが残念で、悲しくてたまらない。

ウ 帝の意に反して御堂殿が国盛を国司に任命したことが納得

できず、悔しくてたまらない。

エ 自分を出し抜き、帝の推薦をとりつけた国盛が憎くてたま

らない。

問三 X に入る言葉として最も適当なものを次の中から選び、記

号で答えなさい。

- ア 冬夜
- イ 机上
- ウ 胸内
- エ 落涙

問四 —— 線3「紅涙盈巾」について、後の(1)・(2)の問いに答えなさい。

(1) 「紅涙」の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 評価が低いことを恨んで流した涙。
- イ 学業の成就を喜んで流した涙。
- ウ 騙^{だま}そうと偽って流した涙。
- エ 苦しみに堪えかねて流した涙。

(2) 「紅涙盈巾」に返り点を付けなさい。

問五 —— 線4「帝、御覧じて、供御も参らず」とありますが、そ

れはなぜですか。理由の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 御堂殿が為時よりも早く出世させることを容認した責任を強く感じており、為時に恨まれることを恐れたから。
- イ 任官を心待ちにしている為時の熱意を知りながら、彼の訴えを聞き入れることなく国司を選んだことを後悔したから。

問六

Y にあてはまる言葉を文中から探し、漢字三字で抜き出しなさい。

ウ 為時が任官を希望していると知りながら、御堂殿が国盛を推薦したことを誤りだと認め、すまないと思つたから。

エ 官職に就くために必死に学問にいそしんできた努力が報われず悲嘆に暮れている為時の思いを知り、哀れに感じたから。

問七

藤原為時は紫式部の父ですが、紫式部の著した作品として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 古事記
- イ 枕草子
- ウ 源氏物語
- エ 更級日記

【国語】

解答用紙 (高校第二回)

受験番号	

氏名	

得点	

一

①	いつかん
②	えもの
③	じかん
④	にし
⑤	みま

二

問一 問二

問三 問四

問五

問六 問七 6 7

三

問一 a b 問二 問三 問四

問五 問六 問七

問八

四

問一 問二

問三

問四 (1) (2) **紅 涙 盈 巾**

問五 問六 問七